

弁論要旨 5

令和 6 年（わ）第 373 号大麻取締法違反事件

被告人 柴崎 和哉

弁論要旨 5（大麻草の有害性は「公知の事実」ではない）

令和 7 年 9 月 4 日

さいたま地方裁判所熊谷支部刑事部 御中

弁護人 丸井 英弘

記

大麻草の有害性が「公知の事実」ではないことは、大麻草の心身についての作用に関するアンドリュー・ワイル証言から明らかである。

1979 年（昭和 54 年）6 月 12 日、京都地方裁判所において、アンドリュー・ワイル氏がマリファナ（大麻草）の科学的研究、心身への影響、社会的・法的背景など証言している（その内容は私のホームページ「麻と人類文化」<https://www.asahi-net.or.jp/~is2h-mri/andrew.html>で 20 年以上前から公開しているので公知の事実である）。その内容の人工知能チャットボットによる説明を紹介する。

1. 証人の背景と専門性

- ・ ワイル氏はハーバード大学で生物学と医学を学び、精神薬理学の研究者や医師、助教授として活動。
- ・ マリファナの研究や論文（1968 年の「Science」誌の論文や「ナチュラール・マインド」書籍など）を書き、世界的にも有名な研究者。特にこの論文は人体実験として画期的なものであり、当時の科学的評価も高い。

2. マリファナの科学的研究と実験結果

- 1968年の人体実験は、ボストン大学医学部で実施され、9人の非経験者と8人の経験者を対象に行われた。
- 目的は、安全性の検証と、マリファナの身体・心理への影響の把握。
- 実験方法は二重盲検法で行われ、連邦政府が押収したマリファナを使用。吸引時間や量も厳密にコントロールされた。
- 結果は、「人体に危害を及ぼすことはほとんどない」「急性中毒や身体的副作用は非常に少ない」「脈拍の増加や血圧の変化もわずか」と述べている。
- 心理的影響については、未経験者はほとんど何も感じず、経験者はハイになったと証言。また、マリファナは「比較的マイルドな薬物」と結論づけている。

3. WHO や他国の調査の批判と資料の信頼性

- WHOの報告書は古い資料に依拠していて、現代の研究や経験からは信頼性に乏しいと批判。
- 古い資料では中毒症状や幻覚、錯覚などが記載されているが、現代の研究ではこれらはほとんど観察されず、環境や期待の心理的要因に影響されていると指摘。
- 例えば、幻覚や人格喪失といった症状は、実験室の安全な環境や期待によるものであり、実際には「精神異常や有害性は非常に少ない」と結論付けている。

4. 法的・社会的背景

- アメリカ国内の規制動向の詳細を述べており、いくつかの州では所持や使用が合法化や軽罰化されている例を紹介。
- アラスカ州の裁判例では、大麻所持についてのプライバシー権や幸福追求の権利を根拠に法律違反の訴えが却下された事例を挙げている。
- 日本の大麻取締法の規定に対しても、規制が逆効果になり得ると指摘。禁止や懲役刑が社会の偏見や犯罪を助長し、実効性に疑問を投げかけている。

5. 健康・精神面への影響

- 一般に、マリファナは喫煙による呼吸器への負担はあるものの、タバコやアルコールに比べて有害性は格段に低く、依存性も弱いと述べている。
- 精神的な影響としては、「幻覚」や「妄想」などは希であり、それらは環境や使い方次第で起こりうるが、一般的には「有害」ではないと結論付けている。
- 「人格喪失」や「離人感」も肯定的・宗教的な観点では「高次の精神状態」として理解されるべきとし、「否定的な有害性はない」と述べている。

6. マリファナの医療用途とその効果

- 医療における効果：証人は、マリファナが長い間医療用途で使われてきたことに言及し、現在もいくつかの州で医療目的として認められていると述べています。
 - 吐き気の緩和：癌患者の抗がん剤治療による吐き気を抑えるために効果的。
 - 緑内障：眼圧を下げる働きにより、視力喪失を防ぐ。
 - 喘息：呼吸器系疾患の緩和。
 - 脳性麻痺：筋肉の緊張や痛みの軽減に寄与。
 - 他の疾患：今後も研究により、多くの疾患に対しても有効性が見出される可能性があるとして述べています。
- 精神的・心の面：
 - 一部の人々は、マリファナの使用が精神的に良い効果があり、瞑想や精神的安定を促すと考える人もいる。
 - 一方、「精神障害や有害性」があるとする見解には批判的で、多くの人にとって精神的影響は限定的またはマイルドであると述べています。
 - 慎重な使い方や適切な環境のもとでは、「精神的に良い作用もある」としています。

7. 文化的・歴史的利用

- 宗教や伝統における利用：
 - インドやアジア諸国、アフリカ、カリブ海の一部の国々では、古くから日常的に利用されてきたと指摘。
 - 特に宗教的、瞑想的な目的で長期間使われてきた歴史があることを紹介。

8. 社会的・経済的背景

- 使用者の層の拡大：
 - 1960年代以降、ベトナム戦争反対運動やヒッピー文化とともに、白人の中流階級の若者たちも多く使うようになった。
 - 現在では社会階層や職業に関係なく広く浸透している。
- 使用率と社会的影響：
 - 米国では1860年代から代々利用が続き、現代では人口の約3分の1が試したことがあり、約1000万から1500万人は日常使用。
 - 使用に関する規制緩和や合法化の傾向が進んでおり、法的制度も緩やかになっている。

9. 法律とその効果

- 規制の実態と影響：
 - アラスカ州の裁判例では、プライバシー権や幸福追求権、憲法上の個人権利を根拠に、大麻所持や使用の刑事罰に違憲判決が出た。
 - 日本の大麻取締法の規定については、過度な刑罰や反社会的なイメージを持たせることにより、社会や個人に逆効果をもたらすと批判。
- 法律の逆効果：
 - 厳格な規制は密かに使用を増やす結果になり、犯罪や無秩序を助長しかねない。

- 。また、取り締まりに多大なコストがかかり、裁判所や警察の負担も増えると指摘。

10. 薬物の有害性と比較

- 。アルコールやタバコよりも致命性や依存性が低いと述べている。
- 。アルコールやタバコは強い依存や健康被害を引き起こしやすいが、マリファナは身体的にも精神的にも安全性が高い。

11. 禁止法とその社会的影響

- ・ 日本の大麻取締法の問題点：
 - 。日本の大麻取締法は、所持や栽培の罰則が重く、これが逆に犯罪の増加や社会的偏見を招いていると指摘。
 - 。実際、アメリカの一部の州では合法化や規制緩和が進行し、適切な規制のもとでは社会の安全と秩序が維持される例が多い。
 - 。禁止法がむしろ密造や密売を助長し、規制の実効性を低めているとの見解。
- ・ アラスカの最高裁判決の例：
 - 。アラスカ州では、プライバシー権や幸福追求の権利を根拠に、大麻所持や使用を違憲とし、州の規制を違法とした裁判例がある。-政府は危険性を証明できなかったため、憲法違反とされた。

12. 薬物の精神作用とその誤解

- ・ 幻覚、錯覚の有無：
 - 。マリファナは、一般的に幻覚を起こすことは少なく、「イリュージョン」（錯覚）は時折起こるが、「ハルシネーション」（幻覚）はほとんどないと証言。
 - 。例えば、「部屋が大きく見えたり、何かが急に龍に見えたり」というのは錯覚であり、これは知覚の遊びやイメージの歪みにすぎず、多くは環境や期待に影響される。

- ・ パニック反応や精神障害：
 - 不安や恐怖に伴うパニックは、「異常事態や環境による反応」であり、多くの場合は一時的で、15～20 分ほどで解消可能。
 - 逆に、環境や心理状態によるものであり、薬物単体の直接的な害ではない。
 - 「人格喪失」「離人感」といった状態も、肯定的・宗教的意義では「高度な精神状態」「瞑想状態」や「悟り」として捉えられ、必ずしも有害ではない。

13. 「精神依存」とその誤解

- ・ 精神依存の定義と実態：
 - 「精神依存」とは、「習慣的な行動の継続」が必ずしも有害だとは限らず、テレビや日常生活でも見られる現象。
 - 依存性が低いとされるマリファナは、長期にわたって吸引しても身体的依存はほとんど見られない。心理的に依存するケースも限定的。

14. 肺や身体への影響

- ・ 呼吸器への障害：
 - 大量喫煙による咳や炎症はあるが、タバコと比較すれば影響は少なく、また煙を吸うのではなく食べる方法(食品化)も有効とされている。
 - 特に、肺や呼吸器の障害は、他の植物や喫煙方法でも起こり得ると指摘。

15. 社会的・法的規制の見直し

- ・ 規制の現状と課題：
 - 厳格な規制は既に逆効果を招いており、社会の秩序や個人のプライバシー権を脅かす。
 - 例えば、アメリカでは、いくつかの州での合法化により、規制コストや裁判の負担が軽減されたケースがある。

- 法律はまじめに適用されるべきだが、現実には密売や密輸を助長し、社会的コストも増大させている。
- 規制緩和のメリット：
 - 社会の焦点が本当に重大な犯罪に移りやすくなり、裁判所や警察の資源を公平に配分できる。
 - 人々の自己決定権や幸福追求権が認められる。

16. 今後の社会と法規制の方向性

- 規制の見直しの必要性：
 - 既存の厳格な規制は、社会の現実と乖離しており、逆効果をもたらしていると指摘。
 - 例えば米国の一部州では、個人の自己決定や医療利用を尊重し、規制を緩和した結果、犯罪や密売の減少、裁判の効率化、社会的偏見の改善が見られる。
- 医療と科学の役割：
 - マリファナは医学的に有用な薬物として認められつつあり、多くの疾患や症状に対して効果が期待できる。
 - 科学的研究の進展により、薬の安全性や効果に関する理解が深まり、より適切な規制や利用法が模索されている。

17. 全体の結論と提言

- マリファナの危険性は比較的低い：
 - 急性中毒や身体への害、依存の可能性は他の常用薬物（タバコやアルコール）と比べてかなり低い。
 - 長期的な脳や身体の障害の証拠も少なく、古い資料や偏見に基づく見解には批判的な視点が必要。
- 規制の適正化と社会的理解の促進：
 - 法的規制や偏見を見直し、科学的・医学的根拠に基づく公平な制度と社会的態度の変化が望ましい。
 - 健康と安全を守る観点からも、過剰な締め付けや偏見を排除し、適切な規制と教育を行うことが重要。
- 結論的に：

- 。マリファナは、適切な環境と使い方次第では、安全に利用できる薬物であり、過度な規制や偏見はむしろ社会の健全な発展を妨げるとの見解を示しています。

この証人の証言全体は、「マリファナに関する偏見や過大な危険性の認識には根拠が乏しい。むしろ、科学的証拠に基づいた規制や理解を深め、適切に取り扱うことが社会全体の利益につながる」とまとめることができます。

(以上)